手紙　三

宮沢賢治

普通中学校などに備え付けてある顕微鏡は、拡大度が六百倍乃至八百倍ぐらいまでですから、蝶の翅の鱗片や馬鈴薯の澱粉粒などは実にはっきり見えますが、割合に小さな細菌などはよくわかりません。千倍ぐらいになりますと、下のレンズの直径が非常に小さくなり、従って視野に光があまりはいらなくなりますので、下のレンズを油に浸してなるべく多くの光を入れて物が見えるようにします。

二千倍という顕微鏡は、数も少くまたこれを調節することができる人も幾人もないそうです。

いま、一番度の高いものは二千二百五十倍或は二千

四百倍と云います。その見得るはずの大さは、

○、○○○一四粍　ですがこれは人によって見えたり見えなかったりするのです。

一方、私共の眼に感ずる光の波長は、

○、○○○七六粍　（赤色）

乃至

○、○○○四粍　（菫色）　ですから

これよりちいさなものの形が完全に私共に見えるはずは決してないのです。

また、普通の顕微鏡で見えないほどちいさなものでも、

ある装置を加えれば、

約○、○○○○○五粍　くら

いまでのものならばぼんやり光る点になって視野にあらわれその存在だけを示します。これを超絶顕微鏡と云います。

ところがあらゆるものの分割の終局たる分子の大きさは水素が、

○、○○○○○○一六粍

砂糖の一種が

○、○○○○○○五五粍　と

いうように

計算されていますから私共は分子の形や構造（こうぞう）は勿論（もちろん）その存在（そんざい）さえも見得（みえ）ないのです。

しかるに、このような、或（あるい）は更（さら）に小さなものをも明（あきらか）に見て、すこしも誤（あやま）らない人はむかしから決（けっ）して少くありません。この人たちは自分のこころを修（おさ）めたのです。

底本：「ポラーノの広場」角川文庫、角川書店
1996（平成8）年6月25日初版発行
底本の親本：「新校本　宮澤賢治全集」筑摩書房
1995（平成7）年5月
入力：ゆうき
校正：noriko saito
2009年7月16日作成
2009年8月15日修正

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。